



皇帝ダリア

125、126 編は共に端書きに **都に上る歌**。とあります。それぞれの詩編には非常に異なる趣があります。

125 編は **主に依り頼む人は、シオンの山。揺らぐことなく、とこしえに座る。(1)** と歌い始めています。自らを **主に依り頼む人の一人**として、祝福された **シオンの山** のような人、と堂々たる比喩をもって捉えています。その人は、信仰がぐらつかず、永遠の平安を得て、地位、任務に就いて、しっかりとそこに落ち着いている人のようです。このような人は、**エルサレム、シオンの山** が、山々に囲まれているように、**主は御自分の民を囲んでくださる／今も、そしてとこしえに。(2)** と、主に依り頼む人々は主が祝福の山々で包み、囲み、守って下さっていると、感謝し、賛美しています。続いて、**シオンの山**、または **主に依り頼む人の座る場所**は **主に従う人に割り当てられた地** と嗣業の地、相続した地であると捉えています。この地に、決して **主に逆らう者の笏が置かれることのないように。主に従う人が悪に手を伸ばすことのないように。(3)** と祈っています。最後に、**主よ、良い人、心のまっすぐな人を／幸せにしてください。(4)** と、非常に素朴で素直な表現が出てきます。この部分と、前段の堂々とした比喩を見て、私はこの詩人は幼子、若い人々を心に置いて、彼らの巡礼のために、祝福を込めて賛美した詩編ではないかと想像します。幼い者、将来に不安のある者は、誰でも自分が祝福された人間であり、安心して生きられる居場所があり、これからも幸せであることを願います。それを確信して生きることが、将来への大きなステップとなるからです。

126 編はそれと全く違って、詩人は **主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて／わたしたちは夢を見ている人ようになった。(1)** と歌いだしています。即ち捕囚の民のような、故郷を離れて奴隷として生きなければならなかった **捕われ人** を覚えて、賛美しています。**捕われ人** が帰還することは、待ち受ける家族、友人にとっても無上の喜びです。その知らせは **口に笑いが／舌に喜びの歌が満ちる(2)** のものでありましょう。解放を見た他国の人々でさえ、「**主はこの人々に、大きな業を成し遂げられた**」と。(2) と、驚くべき偉業である后感嘆するのです。不可能と思えたことを可能とされた主に感謝して、**主よ、ネゲブに川の流れを導くかのように／わたしたちの捕われ人を連れ帰ってください。(4)** と歌っています。巡礼は **捕われ人** が帰還する事と同じであり、心も体もすべての軛から解放される喜びとして、受け止めているのです。最後の2節 **涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる。種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は／束ねた穂を背負い／喜びの歌をうたいながら帰ってくる。(5,6)** は、心に沁みる賛美歌です。

『讚美歌 21』では 125 編の讚美歌はありません。126 編は 20 世紀の英国国教会司祭たちの作詞作曲による 158「捕らわれの民」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2013-01-12> をあげています。

ジユネーブ詩編歌 125 編は <https://www.youtube.com/watch?v=kkqxSZoBqHl&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=125>

126 編は https://www.youtube.com/watch?v=HR_hBryROSo&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=126 です。